

山間豪雪地における高齢者の生活構造とソーシャル・サポート・ニーズに関する研究（第2報）

佐々木美佐子<sup>1)</sup>，小林恵子<sup>1)</sup>，平澤則子<sup>1)</sup>，飯吉令枝<sup>1)</sup>，斎藤智子<sup>1)</sup>

1)新潟県立看護大学（地域看護学）

Study of Life Style and Social Support Needs for Elderly in Heavily Snowy Areas. (II)

Misako Sasaki, Keiko Kobayashi, Noriko Hirasawa, Yoshie Iiyoshi, Tomoko Saitoh  
Niigata College of Nursing (Community Health Nursing)

キーワード：山間豪雪地 (heavily snowy areas)，高齢者 (elderly)，生活構造 (life style)，  
ソーシャル・サポート・ニーズ (social support needs)，  
ソーシャル・サポート・システム (social support system)

要旨

豪雪地域という地域特性を踏まえた高齢者のソーシャル・サポートを整備するための基礎資料を得ることを目的に，1. 豪雪地に暮らす高齢者の生活構造と健康関連 QOL およびサポート・ニーズの季節比較，2. 高齢者のソーシャル・サポート・システム構築のためのグループ・インタビュー，3. 1. 2 の結果を踏まえ，高齢者のソーシャル・サポート・システム構築における課題の検討を行った。季節比較では，活動能力，サポート・ニーズに差は見られず，健康関連 QOL は，「BP；身体の痛み」，「VT；活力」に差が見られた。サポート・ニーズでは，冬季は除雪や道つけといった豪雪地特有のニーズ，2 割の高齢者は年間を通じて送迎などのニーズがあった。グループ・インタビューでは，『生活を営むためのニーズ』，『相互支援について話し合う場』のニーズに対して，『高齢者のニーズ把握と話し合いの場づくり』，『高齢者の SOS を早期に見つけて助ける仕組みづくり』という 2 つの課題が抽出された。

『高齢者のニーズ把握と話し合いの場づくり』，『高齢者の SOS を早期に見つけて助ける仕組みづくり』は早急に取り組むべき課題であり，安塚町においては，当事者である高齢者の主体的な参加を促すことが課題である。

目的

過疎化，高齢化が進展している山間農村部において，豪雪地域という地域特性が高齢者の生活構造や健康にどのように影響するかを把握することは，高齢者のソーシャル・サポートを整備する立場からも重要な課題である。

そこで，本研究では，豪雪地域における高齢者の健康と生活構造及びソーシャル・サポート・ニーズについて，冬季と夏季に実態調査を行い，季節比較をすることでニーズの傾向を明らかにし，豪雪地域に暮らす高齢者のソーシャル・サポートのあり方を検討することを目的とした。

本報告では，高齢者の生活構造とソーシャル・サポート・ニーズを季節比較し，地域の相互扶助を重視した効果的なサービスを提供するために必要な条件についてまとめた。

研究方法

1. 対象地域の概況

東頸城郡安塚町（山間豪雪地）は，平成 13 年 4 月現在の人口 3701 人，高齢化率 34.2% で，降雪量は約 5m（11 月～3 月）である。

2. 調査方法と対象

### 1) 高齢者の生活構造とソーシャル・サポート・ニーズ調査

冬季調査<sup>1)</sup>は、平成14年12月1日現在、要介護度Ⅱ以上を除く65歳以上の一人暮らし及び高齢者のみ世帯の対象者475人を無作為抽出により158人選定し、同意が得られた136人を分析対象とした。夏季調査は、冬季調査136人の反復調査とし、調査拒否、不在を除いた130人を今回の分析対象とした。

調査は戸別訪問にて質問紙を用いて聞き取り調査を行った。調査員は、大学教員と雇用した在宅看護師とし、インタビューガイドを用いて説明会を実施した。調査期間は、平成16年6月16日から7月15日までであった。

調査内容は、基本属性(性、年齢、世帯構造)、老研式活動能力指標、生活構造、ソーシャル・サポート・ニーズ、包括的QOL尺度として使われているSF-36(MOS Short Form 36)<sup>2)</sup>などとした。生活構造は、松原の生活構造構成要素<sup>3)</sup>を参考に、「空間」「手段」について27の生活行動項目を設定し、「よく実施している」「まあまあ実施している」「あまり実施していない」「全く実施していない」の4段階で回答を求めた。ソーシャル・サポート・ニーズは、生活行動についてそれぞれニーズの有無を調査した。

調査の協力に関しては、面接時に対象者の意思を尊重すること、個人情報に関する秘密を守ることなどを説明し、確認をした上で了解を得た。

分析にあたり、生活行動は、「よく実施している」「まあまあ実施している」を「実施群」、「あまり実施していない」「全く実施していない」を「未実施群」にし、季節間での比較を行った。統計解析は、SPSS for windows 11.0を使用し、 $\chi^2$ 検定、対応のあるt検定を行った。

### 2) 高齢者のソーシャル・サポート・システム構築のためのグループ・インタビュー調査

安塚町の地域特性、高齢者の保健福祉サービスにおける課題に精通している者8名を対象としてグループ・インタビューを行ない、「ボランティアがとらえる高齢者のサポート・ニーズ」「高齢者に対する地域住民のサポートの現状と課題」「ソーシャル・サポート・システム推進において必要な環境条件」について情報収集した。グループ・メンバーは役場保健師に選定してもらった。グループ・インタビューの実施と分析においては、専門家の参加を得て指導・助言を得た。

実施は平成15年11月であった。

## 結果

### 1. 基本的項目

#### 1) 対象者の属性

対象者の平均年齢は73.8歳で、男性55人(42.3%)、女性75人(57.7%)、75歳未満74人(56.9%)、75歳以上56人(43.1%)、単身世帯25人(19.2%)、高齢者のみ世帯105人(80.8%)であった。受療有の割合は85%であった。

#### 2) 活動能力

老研式活動能力指標における活動能力の得点は、冬季では平均得点10.5(SD±2.9)点、夏季では10.5(SD±3.3)であった。活動能力を「手段的自立(IADL)」「知的能動性」「社会的役割」の項目に分けて算出した平均点は、冬季ではIADL4.3(SD±1.4)点、知的能動性3.0(SD±1.2)点、社会的役割3.2(SD±1.0)点、夏季ではIADL4.3(SD±1.4)点、知的能動性3.1(SD±1.2)点、社会的役割3.2(SD±1.1)点であった。活動能力の得点、「手段的自立(IADL)」「知的能動性」「社会的役割」の平均点は、季節による差がみられなかった。

#### 3) 健康関連QOL

QOL得点の各サブスケールの平均得点を季節間でみると、「BP; 身体の痛み」、「VT; 活力」のみ

季節により差があり、体の痛みは夏の方が低く(痛み強い)、活力は冬の方が高かった(表1)。

表1 SF-36 平均スコア(季節差)

	PF 身体機能	RP 日常役割(身体)	BP 体の痛み	GH 全体的健康観	VT 活力	SF 社会生活	RE 日常役割(精神)	MH 心の健康
冬	71.54	70.85	69.22	60.10	72.46	90.67	79.27	81.77
夏	70.50	72.89	64.29	60.71	68.27	91.92	84.62	82.64
有意差			*		**			

\* $p<0.05$  \*\* $p<0.01$

#### 4) 生活行動とサポート・ニーズ

生活行動を季節別でみると、冬季のほうが夏季よりも実施率が高かった項目は、「バスに乗って一人で外出」のみであった( $p<0.05$ )。サポート・ニーズでは、夏季のほうが冬季よりも「防火・防犯」のニーズが多かった( $p<0.05$ ) (表3)。

表3 生活行動とサポート・ニーズ(季節間)

	生活行為(実施%)			サポートニーズ(有の%)		
	冬	夏	有意差	冬	夏	有意差
バスに乗って一人で外出	103(76.3)	84(63.6)	*	19(14.1)	29(22.0)	
食料品の買い物	119(88.1)	112(84.8)		23(17.0)	26(19.7)	
食事を作る	112(83.0)	107(81.1)		8(5.9)	8(6.1)	
洗濯をする	101(74.8)	104(78.8)		3(2.2)	6(4.5)	
掃除をする	106(78.5)	105(79.5)		6(4.4)	7(5.3)	
入浴する	120(88.9)	124(93.9)		4(3.0)	5(3.8)	
布団に関すること	96(71.1)	99(75.0)		7(5.2)	10(7.6)	
ごみを捨てる	107(79.3)	106(80.3)		10(7.4)	11(8.4)	
電球交換・電化製品の手入れ	69(51.1)	76(57.6)		39(28.9)	36(27.3)	
預貯金のおし入れ	107(79.3)	98(74.2)		10(7.4)	16(12.1)	
書類を書く	98(72.6)	99(75.0)		18(13.3)	16(12.1)	
散歩をする	83(61.5)	78(59.1)		9(6.7)	10(7.6)	
運動・スポーツをする	40(29.6)	37(28.0)		9(6.8)	4(3.1)	
老人クラブに参加する	73(54.9)	77(58.8)		7(5.3)	13(10.1)	
ボランティアをする	30(22.2)	34(25.8)		6(4.5)	4(3.2)	
病院・医院へ受診する	111(82.2)	111(84.7)		29(21.5)	22(16.7)	
家族と話をする	121(93.8)	119(94.4)		3(2.3)	0(0.0)	
近隣と話しをする	112(83.0)	118(89.4)		6(4.4)	5(3.8)	
新聞を読む	105(77.8)	96(72.7)		5(3.7)	4(3.1)	
趣味をする	82(60.7)	78(59.1)		5(3.7)	6(4.7)	
ストーブの準備	100(74.1)			21(15.6)		
庭や家のまわりの管理	101(74.8)			11(8.2)		
雪下ろしをする	54(40.9)			34(25.8)		
除雪する	85(63.0)			26(19.4)		
防火・防犯	118(87.4)	114(86.4)		3(2.2)	15(11.4)	**
緊急時の連絡体制	110(81.5)	100(75.8)		12(8.9)	19(14.4)	
災害への備え	92(68.1)	65(49.6)		12(9.0)	18(13.6)	

\* $p<0.05$  \*\* $p<0.01$

## 2. 地域の相互扶助を重視した効果的なサービスを提供するために必要な条件

ボランティアがとらえる高齢者のサポート・ニーズとして、『生活を営むためのニーズ』、『相互

支援について話し合う場』の2つの重要カテゴリが抽出された。そのカテゴリを構成する重要アイテムは、『生活を営むためのニーズ』では、「送迎」、「買い物」、「読み聞かせ」、「書類書き」、「環境整備」の5つが、『相互支援について話し合う場』では、「人との交流」、「話し合いの場」の2つが抽出された（表4）。

高齢者に対する地域住民のサポートの課題として、『高齢者の意識改革とニーズ把握』、『ボランティアの周知と運営』の2つの重要カテゴリが抽出された。重要アイテムとして、『高齢者の意識改革とニーズ把握』では、「我慢せずに手助けを求めるという高齢者の意識改革」、「高齢者とのつながりを持ち、高齢者のニーズの顕在化」という2つが、『ボランティアの周知と運営』では、「有償ボランティアの周知（申請や依頼の仕方など）」、「有償の程度（手助けに対する対価）の合意形成」、「利用者の都合に合わせた柔軟なサービスの提供」という3つが抽出された（表5）。

ソーシャル・サポート・システム推進において必要な仕組みとして、『高齢者のニーズ把握と話し合いの場づくり』、『高齢者のSOSを早期に見つけて助ける仕組みづくり』の2つの重要カテゴリが抽出された。重要アイテムとして、『高齢者のニーズ把握と話し合いの場づくり』では、「高齢者の既存の会への主体的参加（既存の組織やサービスに高齢者の主体的参加を促す）」、「ボランティア団体等の連絡協議会の設置」の2つが、『高齢者のSOSを早期に見つけて助ける仕組みづくり』では、「高齢者のお茶のみグループによる安否確認」、「民生委員がお茶のみグループとつながりを持つ」、「高齢者からニーズを発信してくれる仕組み」、「近隣付き合いの促進」、「ニコニコサロン等の集いに閉じこもりがちな人の参加勧奨」の5つが抽出された（表6）。

表4 ボランティアがとらえる高齢者のサポート・ニーズ

重要カテゴリ	重要アイテム	一人暮らし	高齢者世帯	虚弱・介護	健康高齢者
生活を営む上でのニーズ	送迎 (足の確保)	通院・買い物・ニコニコサロン等への車で の送迎が必要	○	○	
	買い物	・移動スーパーが欲しい ・小売店の配達 農協の食材宅配			
	読み聞かせ	視力が弱い人への通知文等の読み聞かせ			
	書類書き	預貯金の書類書き			
	環境の整備	冬場の除雪・道付けの援助 ストーブの灯油タンクの管理	○	○	
相互支援について話し合う場	人との交流	一人暮らしの人は寂しい 相談相手を求めている	○		
	話し合いの場	今後の暮らしについて高齢者が互いに話し合う場が必要	○		○

注) 「一人暮らし」、「高齢者世帯」、「虚弱・要介護高齢者」、「健康高齢者」ごとに、該当するサポート・ニーズを○で表示。

表5 高齢者に対する地域住民のサポートの課題

重要カテゴリ	重要アイテム
高齢者の意識改革とニーズ把握	1.我慢せずに手助けを求めるという高齢者の意識改革 2.高齢者とのつながりを持ち、高齢者のニーズの顕在化
ボランティアの周知と運営	1.有償ボランティアの周知（申請や依頼の仕方など） 2.有償の程度（手助けに対する対価）の合意形成 3.利用者の都合に合わせた柔軟なサービスの提供。

表6 ソーシャル・サポート・システム推進において必要な仕組み

重要カテゴリ	重要アイテム
--------	--------

高齢者のニーズ把握と話し合いの場づくり	1. 高齢者の既存の会への主体的参加（既存の組織やサービスに高齢者の主体的参加を促す） ・保健師の健康相談会、ニコニコサロン、高齢者の既存の会 ・高齢者が楽しく参加できるような工夫 ・近隣の声がけと参加できない人のニーズ把握 2. ボランティア団体等の連絡協議会の設置 ・地域住民、高齢者、ボランティア、民生委員、ヘルパー、保健師等 ・地域のつながりや支えあいについての情報交換 ・社会福祉協議会が中心となり関係者に声がけ
高齢者の SOS を早期に見つけて助ける仕組みづくり	1. 高齢者のお茶のみグループによる安否確認 2. 民生委員がお茶のみグループとつながりを持つ 3. 高齢者からニーズを発信してくれる仕組み 4. 近隣付き合いの促進 5. ニコニコサロン等の集いに閉じこもりがちな人の参加勧奨

## 考察

### 1. 高齢者の活動能力と健康関連 QOL の季節比較

老研式活動能力指標の得点数の平均は、冬季、夏季共に 10.5 点で季節の差は見られなかったことから、高齢者の活動能力は季節による影響は少ないといえる。藤原<sup>5)</sup>は、老研式活動能力指標が 10 点以上の生活機能のほぼ自立した高齢者の場合、「手段的自立」においては 1 点以上、「知的能動性」、「社会的役割」及び総得点においては 2 点以上の変化が見られた場合は、生活背景を含めてその要因を明らかにし、介護予防の視点から適切な個別指導に結びつける必要性を提言している。今後、活動能力の変化を捉え、支援の必要な高齢者を早期に発見することが重要となる。

健康関連 QOL は、冬季・夏季共に「社会生活機能」が最も高く、「日常生活役割機能（身体）」「身体痛み」「日常生活役割機能（精神）」「活力」は全国の平均得点<sup>2)</sup>を上回っていた。本研究で季節差のあったサブスケールは「BP；身体痛み」と「VT；活力」であったが、健康関連 QOL は年齢との関連が強いことから<sup>6)</sup>、今後は、この変化が季節によるものか、加齢によるものかを検討し、季節と QOL の傾向を明らかにする必要がある。

### 2. 高齢者の生活構造とソーシャル・サポート・ニーズの季節比較

生活行動では、季節差が見られたのは「バスに乗って一人で外出」、サポート・ニーズにおいて季節差が見られたのは「防火・防犯」のニーズのみであったことから、高齢者の生活行動やサポート・ニーズには季節差はなく、高齢者は活動能力に見合った生活をしていることが考えられる。冬季は除雪や道付けといった豪雪地特有のニーズがあり、そのサポートが必要となる。一方、2 割の高齢者が年間を通じて送迎（足の確保）、買い物、書類の読み聞かせ、書類書き、人との交流などを求めていることから、高齢者支援においてはサポート・ニーズを有する高齢者を把握し、高齢者が望む生活に向けた自立への支援が必要と考えられる。

### 3. 地域の相互扶助を重視した効果的なサービスを提供するために必要な条件

グループ・インタビューにおいて、送迎、買い物などの「生活を営むためのニーズ」と人との交流など、高齢者の調査結果と同様のニーズが出されており、サービス利用者側のニーズと地域の民生委員やボランティア等のサービス提供者側が捉えているニーズにずれがないことが確認できた。

現在、安塚町では社会福祉協議会を中心に「支えあいの町づくり」を推進している。平成 15 年に有償ボランティア制度が創設されたが、その活用はまだ十分とはいえない状況である。本研究で明らかになった、「高齢者の意識改革とニーズ把握」、「有償ボランティアの周知（申請や依頼の仕方など）」という課題に取り組むことで、今後、有償ボランティアの利用が促進すると考えられる。

住み慣れた地で安心して暮らせる町づくりを進めるために、地域住民の一人ひとりが生活の質を高める意識を向上し地域づくりに参加する「住民主体」の取り組みが求められている。ソーシャル・サポート・システム推進において必要な仕組みとして、「高齢者のニーズ把握と話し合いの場づくり」「高齢者の SOS を早期に見つけて助ける仕組みづくり」は早急に取り組むべき課題であり、安塚町においては、当事者である高齢者を巻き込むことが重要である。

今後は、本研究結果を保健医療福祉関係者に提示し、地域のサポート・システムがどのように構築されていくのか、住民の活動に参画しながら経過を把握すると共に、高齢者の活動能力や健康状態を縦断的に把握し、いつ、どのような状況においてニーズが発現するのか、どのようなサポートがあれば高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らせるのかの具体的内容を追究し、高齢者のソーシャル・サポート・システムの構築に向けていく予定である。

## 結論

- 1) 山間豪雪地における高齢者の生活構造とソーシャル・サポート・ニーズについては、季節による差はほとんど見られなかった。
- 2) SF36 で測定した QOL では、「BP ; 身体の痛み」、「VT ; 活力」のみ季節により差があり、体の痛みは夏のほうが低く(痛み強い)、活力は冬のほうが高かった。
- 3) グループインタビューから、「生活を営むためのニーズ」、「相互支援について話し合う場」のニーズに対して、「高齢者のニーズ把握と話し合いの場づくり」、「高齢者の SOS を早期に見つけて助ける仕組みづくり」という 2 つの課題が抽出された。
- 4) ソーシャル・サポート・システム推進において必要な仕組みとして明らかになった、「高齢者のニーズ把握と話し合いの場づくり」、「高齢者の SOS を早期に見つけて助ける仕組みづくり」は早急に取り組むべき課題であり、当事者である高齢者の主体的参加を促すことが重要である。

## 引用文献

- 1) 佐々木美佐子. 小林恵子. 平澤則子. 飯吉令枝. 斉藤智子他.: 山間豪雪地における高齢者の生活構造とソーシャル・サポート・ニーズに関する研究.平成 14 年度看護研究交流センター事業活動・事業報告;2003;9-16
- 2) 黒川清監修,福原俊一,鈴鴨よしみ編集.健康関連尺度 SF-36 日本語版マニュアル version1.2
- 3) 松原治郎. 生活構造と地域社会. 家族と地域の社会学. 東京: 東京大学出版会, 1980: 143-68
- 4) 古谷野亘, 橋本廸生, 府川哲夫, 柴田博, 郡司篤晃. 地域老人の生活機能一老研式活動能力指標による測定値の分布一.日本公衆衛生学雑誌 1993; 40(6): 468-73
- 5) 藤原佳典, 新開省二, 天野秀紀他. 自立高齢者における老研式活動能力指標得点の変動. 日本公衆衛生学雑誌 2003; 50(4): 360-7
- 6) 森克美,川久保清,李延秀.日本語版 SF-36 を用いた地域住民の HR QOL の測定.「厚生指標」2002;49(13):1-5